

一月五日

朝、3月の早稲田ハウハウス佐賀のプログラムを作る。佐賀での最終回になるので、それなりのものになりたい。森川嘉一郎が提示してくるプログラムはまだ全然使い物にならない。世間の仕組みというのが解らないんだなキット。典型的オタク特有の思考形式のママである。でもね、理論家を目指すのだったらこういう事が一番大事なのだよ。

昼、宗柳で地下室の新年会。杉並の現場に抜けた三名を除いて地下室メンバー全員。十五時修了。朝からの打合わせで言いたかった事は、今年から何らかの形式の中で都市そのものをプロジェクトの対象にしたいという事だ。それをスタッフの何人かが共感し、理解してくれたら嬉しいのだけれども、むづかしいだろうな。自分のスタッフ、あるいは若年の人達ばかりとの打合わせは問題を含む。自分が最年長で、しかも強い異論があり得ぬ事を前提としているからだ。この類の身内だけの打合わせには用心しなくてはならぬ。自分で自分の考えを否定する意見を用意しておく必要さえあるのだ。

一月六日

朝五時起床。荷作りをして羽田へ。プノンペン、ホーチミンの天気の感じがつかめなくて意外に荷物が大きくなってしまった。道路が空いていて六時半には羽田に着いてしまう。八時〇五分J

ALで関空へ。プノンペンもホーチミンもインド亜大陸南端マドラス、マドライよりも南なんだ。最後にバッグに突込んだセーターは余計だったかも知らん。関空で換金。渋井、小笠原さんへの手みやげ購入。何がいいのか遂に思い当たらぬのでバラントイン二本。ホーチミンへのフライトはスケジュール変更になっていて十分早くなっていった。何故十分だけ早いのかミステリーといえばミステリーだ。関空の免税品店の品ぞろえは明らかに成田とはちがってるな。ピアノ設計の建築のハイテク振りとは正反対に泥臭く実利的だ。余計なモノが置かれていない。東京駅JR東海のキオスクと東北新幹線のキオスクはプラットホームが一つがうだけで別な世界なのと同じだ。アジアの人が多からだろう。地域差は明らかに在ることが良くわかる。JAL便はヴェトナム航空とジョイント便でスチュワード、スチュワード共にヴェトナム人のようだ。アオザイのスタイルだけ模して布のテクスチャーがちがうスチュワードのユニフォームがピアノ設計のハイテクの中に浮いている。浮くと言うよりも逆に沈んでると言った方が良いか。アジアの近代化西欧化の大矛盾は今も続いているのだね。しかしなあ、ヨーロッパの空港で良く見かける日本人団体の雰囲気もそれにも増して異様だよな残念ながら。空港のトランジットスペースがハイテクでニュートラルであればある程に人間の地域性というか非ニュートラルな性格が浮かび上がる。ヴェトナムへは五時間と五〇分のフライトだ。七面倒臭い本を二冊程持ってきたので読むとするか。「国家と倫理」特集の小冊子読むも三ページもたずに眠りに入る。

突然光が指し込み、行きづまっている磯崎新論のアイデアがまとまりかかった。人間で変な者だよ。事件の連続の中に磯崎を登場させ、作品を描こうとする方法に変わりはないのだけれど、カ

タール、マカオ、人民大会堂というような大事件ばかりの連続ばかりではディテールに欠けるような気がしていたのだが、マハリシ、空中浮遊、そして墓の章を入れると全体を歌舞伎のような、華美過ぎる様式から脱けさせる事ができるのに気付いた。小さなようでこれは大事なんだ。又、これでしばらく楽しく書き進められそう。一度、京都に行く機会があれば出雲の阿国の墓の近くにあるという磯崎新の墓所を視ておこう。ヴェニスで視たノーノの墓の印象と山口の芸術村のN邸の標本再生をまとめて小さな章にすれば良い。磯崎はデュシャンみたいな事考えてるに決ってるんだから。

ひろしまハウスの現場では開放系技術論の小さな章が書ける筈だから、今日がきっかけで長編2本が再出発できそう。現在、日本時間四時二五分。もうすぐホーチミンシティに着く。空は光の輝度が圧倒的に強くなっている。着陸の準備に入るといいうアナウンスが今あった。

ヴェトナム時間十四時五〇分ホーチミン着。小さな田舎の空港でヴェトナム戦争当時からものだろうカマボコ型の小型格納庫がまだ沢山残されていて今はヘリコプターが入ってる。トランジットの手続きをして待合室でジャケット、長そでシャツから半そでに着替える。程々の暑さだ。東南アジアだなあと当り前の事を実感してるところ。もう若くはないのだからこの気温の激変には注意して順応しなくちゃならぬ。まったく年だ。十六時四五分ホーチミン発。小さな双発のプロペラ機。眼下は圧倒的な田園。制御されていない川。しかしながら所どころに小さな工場風の建物やモダンな箱状のモノが建ち始めているのが見える。去年もおとしも気がつかなかった事だ。凄い勢いでヴェトナムは近代化してる最中なのだろう。コンクリートで川をしばらずに巧妙に

コントロールする知恵を何とかヴェトナムの技術者は身につけてはいけないと思う。日本の二の舞はおろかだ。

五時二〇分プノンペン空港着。入国審査カードのカンボジアの住所にワット・ウナロムと書いて様子をうかがったが何の問題もなし。スムーズに通過した。これからはコレでヤロー。小乗仏教の大本山の御威光は凄いもんだ。外へ出ると迎えに来てくれる筈の洪井さんの姿がない。予定よりだいぶ早く着いてしまったので仕方ないかと思っていたら、遠くに手持ち無沙汰な洪井夫妻の姿があった。まだ着く筈はないと思っただらしい。再会を喜ぶ。

小笠原さんは一時日本に帰ったとの事。残念だが仕方ない。久しぶりのウナロム寺院の日本語学校図書館は懐かしいような感じさえあった。ひろしまハウスは仏足も乗り内部吹き抜けを走り抜ける階段も出来ていて、迫力満点になっていた。ホツとする。洪井さんはヒジを痛めていてカンボジアでは直せないとの事。一日日本に帰国しなければならぬとの事。彼も五四才になって、一度ゆっくり休むべき時なのだろう。夕食後あまりに眠くなって、許しを乞うて三〇分程仮眠。息を吹き返した。私も休みが必要になっっているのは言うまでもない。星の大きさが異常である。

ワットウナロム境内で眠る事の快適さは驚くほどに多様な音が溢れている事からくるようだ。静かな海の底のようなざわめきがある。今日はその中で休むことができる。

一月七日

犬の遠吠を遠くに聞きながら眠ったが、寒くて眼がさめた。

やっぱり外のテラスで眠るのは無理だ。セーターは持って来て良かった。朝五時チョイ前。風が吹いてカヤを揺らしている。今日はレンガ積みツアーの人達が二陣に分かれて到着する。午前中は

カンボジア大使公邸に行く予定になっている。星明りで見ると、しまハウスの現場は我ながら仲々のモノだ。建築やって良かったとさえ思う。大きな壁の中から巨大な樹木が生まれて、そこにも仏陀がいるというイメージがチョツと出来たかなと思う。外壁が出来ればその感じは皆にも解りやすいモノになるだろう。アンコールワットで体験した樹木の生命力は建築を破壊する凄惨さだった。その樹木（自然）の生命力を切り殺さずに、穏やかにコントロールして、なおかつそんな樹木の感じを空間化しようというのがひろしまハウスのデザインの主題だ。シャカは菩提樹の下で悟りを得たという。その故事を建築に表現しようとしている。

菩提樹の下の解脱こそ平和のシンボルではないか。ひろしまハウスの内部の大きな空間に曲がり傾いた柱を林立させて、その柱の頂に仏足を置いたのは正解であったとようやく確信する事が出来た。夜が明けたら、あの樹下に立ってみよう。そこに安らぎと静けさを感じることが出来れば、この建築の目的はほぼ達成できたとと言える。ひろしまハウスは皆に安らぎを感じてもらいたいと願って建てている寺院でもあるのだ。ウナロム寺院の本殿は雄壮なストウパーである。都市プランペンの空間を構造化しようとして一九五七年に建立された。ポルポトもこの寺院を破壊する事はたまたらって司令部として使用した。ある意味では仏教の力がそうなきしめた。私は仏教徒ではないけれど、今でも仏陀の像の前にすると何故か手を合わせる習性は残っている。そのかすかな習性がこの建築を建てさせている。その事は恐れずに言明した方が良い。

東の空が朱色に明けてきた。只今六時。

ひろしまハウスの二階では現場に棲みついでしまった人達が火を炊き始めた。朝食の仕度なんだろう。現場前の路上には二、三組の家族が簡単な差し掛けを作って生活している。すでに未完の

ひろしまハウスは使われ始めている。これで良い。これが建築の始まりなのだ。（この境内には今僧侶が約四百人、その他が千人暮しているそうだ。）

十時半日本大使館。小川大使をはじめカンボジア日本人会会長等と名刺交換会。昼前仏教学院に戻る。第一陣到着。あいさつと若干の注意をして、早速昼食の買い出しへ。十五時三〇分現場集合とする。二十一名でレンガ積み始める。やはり年長者の手際が良い。しかし学生達も良く頑張っている。坂口トーマスの導糸張りが手間取ってまどろっこしいが仕方ない。女性も良く頑張っている。五時半作業終了。後片付けと道具洗いをさせて三階において若干の建築の説明をして今日の作業は完了。皆良い汗をかけた。

食事をすませた頃第二陣の学生達九名到着。総勢三〇名となる。その後一名到着三十一名となる。十一名は渋井農場へ。九時過就寝。

良い一日だった。

一月八日

朝五時前に起床。まだ全員寝ている。皆上手に蚊屋を張って棲み分けたようだ。流石にレンガ積みツアーに参加の学生にイイ加減な者はいない。今日は少しゆっくり目のペースで仕事をさせよう。五時半起床。掃除を三〇分。朝の食事は皆外食と決めたようだ。六時食事と散歩へ。八時集合。坂口トーマスは先に導糸張りをさせよう。八時四十五分現場集合再びチームを作り内部壁のレンガ積み。十時小休止。十一時四五分に朝の仕事休止。昼食は自炊。二時二〇分現場集合。三時半小休。五時レンガ積み修了の予定で進めたい。只今五時十五分学生達が起き始めた。今日も一日

事故の無いようにいのる。

予定通り作業をすすめ、今昼の休み。日射しがきつい。午後北西の方角より写真をとる。屋根の仏足が動きを見せて面白い。キツイ光の中でスケッチをする。レンガ積みは順調に進んでいる。夕方には中庭の感じを身体でつかめるようになるだろう。内部空間の光がまだつかめない。何故か人数は増えてきて総勢は三十四人。一つの壁に四人がかりでうまく仕事もすすんだ。夕方五時前修了。

六時JETROの仲根氏が迎えに来る。七時よりJETROで会食。日本人会会長。商工会会長等と。ひろしまハウスの運営に関して率直な意見を交換した。明朝八時過現場を見てもらう事になった。どんな意見も、どんな人間も受け入れた方がよい。

一月九日

朝五時前起床。セーター持ってきて良かった。ベトナムの方角から早朝吹く風が寒い。流石に三十数名が宿泊すると壮観だ。皆さんには不便だろうが。しかし今の若い人達も見捨てたもんじやない。仲々良くやってる。今日は半分くらいの人間がアンコールワットへいくので現場はゆっくり目にすすめよう。私も午後にはホーチミンに行く予定。ひろしまハウスもプノンペンで少しづつ認知されてきたようで、ゆっくりではあるが着実なペースだと考えたい。洪井さんのお蔭だ。私もゆっくりやってゆこう。この朝の風はミャンマのパガンで吹かれた陰々滅々たる風と良く似ている。パガンでは諸行無常の風だと感じたがここではそれ程の事は無い。パガンは死の都市であったな。

午前中少しレンガ積みの仕事をみて、昼空港へ。良い参加者だった。帰ったら五月のツアーの準備をしなければ。もう少し工

夫が必要だ。朝、日本人会会長等が現場を見に来てくれた。専門家の眼で眺めてコンクリートもきれいで構造体としたらプノンペン随一だと言ってもらった。会長は土木屋さんなので面白い評価だと思った。カンボジア式便所に慣れてしまったので空港のトイレが何となく使いにくい、と言うよりも照れくさい。

洪井さんからおみやげに頂いた鉄製のハカリが案の定セキュリティチェックにひっかかり手荷物として持込不可。

ヴェトナムでは家具の値段を調べて一部実験的に輸入してみる予定。カンボジアの家具はまだ日本には無理だ。仕事が荒過ぎる。私の建築に家具をビルトインする積りなのだがヴェトナムのモノくらいから始めれば良いかも知れぬという目星を確認するためのホーチミンである。今空港内を黒塗りの車が隊列を作って通り過ぎた。塩川正十郎大臣が今日からカンボジア訪問と大使館で聞いていたからソレであろう。いつだったか桜内義雄元衆院議長もシエリムアップで見掛けたことがあった。政治家は不思議な所に出没するものだ。

十五時過ホーチミン、タンソンニャット国際空港着。マジエスティックホテルに入る。一九九六年以来の再来。サイゴン河沿いの巨大看板の林立風景も変っていない。

夕食はヴェトナムハウスで。ウエイトレスのユニフォームがテーパーク風になっていて眼ざわり。この前はこんな事はなかった。帽子が噴飯モノ。ヴェトナムの兵隊・警官のユニフォームは完全にアナクロで町から浮いているのだが、それに似ているデカクて赤いモール飾りが付いていてまるで雄二ワトリのトサカだ。ヴェトナム航空のユニフォームが持つ異和感と通じている。

国家関係のモノばかりだから指導者層の好みにそういうモノがあるんだろう。ドンコイ通りのアンティーク風家具屋をひやかして

ホテルに戻る。

一月十日

六時半眼がさめる。やっぱり床で寝るよりは柔らかいベッドで寝る方が楽なんだ。サイゴン河は大小の船の行き来が盛んでエネルギッシュ。道路もバイクと自転車で溢れている。サクランボみたいな太陽が昇りつつある。ヴェトナム戦争の時はサイゴン河に流れているウォーターヒヤシンスの下にベトコンが隠れて襲来したという。そのウォーターヒヤシンスが今でも沢山流れている。

午前中レユアン通りの家具屋へ。良いモノは無かった。大体中型の引出し付収納(薬屋タイプのモノ)で四万円位。日本の十分の一くらいの価格であろう。ホーチミンシティの中心部にはガラスのカーテンウォール高層ビルが林立し、そのスタイルがスーパーコマーシャルなものポストモダンコピーのもの入り混じって、なんだか夢うつつなシティになり始めている。近代化を急ぐアジアの大都市は現実離れたファンタジーになりつつあるのだろうか。ミラージュシティ。

昨夕ひやかしてみた家具屋が今のところ一番良い。七、八万円中で、大型の収納ダンスが買えるようだ。夕方本格的に交渉してみよう。コンテナ一台分買うのが合理的なのだが、それは五月まで待とう。カンボジア日本のコンテナフレイトが一本千五百ドルと聞いた。シアトル東京が今五百ドルだから、流通経費に関しては地球は歪んでいる。ホーチミンにはホンダのバイクが溢れ返っているが、ホンダはこのバイクを何処で生産しているのかな。日本と異なるのは街にバイクを修理する人間も又、多い事だ。日本ではもう小型バイクは使い捨てだろう。こちらではまだ修理できる人間がいる。職人も呼べぬ人達だけれど、小型バイクをバラバ

ラに解体して(エンジンまでも)、又組み立て直すことができる人達だ。私はもうどんな機械も解体して再びアッセンブルできない。私の手はもう猿のそれくらいに退化してしまっている。

これからの都市には車はすでに適していない。自転車とモーターバイクがハイブリッドして太陽電池がプラグインされたものにすべきだろう。チョットとした故障は自分で修理すべきだろうが今の日本人には不可能ではないか。修理する能力について考えてみる必要があるだろう。

街頭でミシンをまだ一台も見えていない。ヴェトナムのししゅう細工はミシン抜きでは考えられぬから、何処かに大量に在るにちがいないのに。日本の中古ミシンが。

近代化。ミシン。修理能力の図式が成立する筈だ。ゴミの姿形が日本ヴェトナムカンボジアでは異なる。日本で見える自動車バイクのゴミの山はヴェトナムには無い。みんな修理してしまうからだ。カンボジアにはまだ工業製品自体がゆき渡るシステムがない。

ホーチミン市の街頭でバイクをバラバラに解体して修理する人はレヴィストロースのブリコラージュが更に進化した概念を示しているのではないか。「室内」の連載次回は日本の自動車のゴミの山とホーチミンの修理再生する人に関する考察をやってみよう。

コレをキッチンと書けば大論文になるだろうに。ゴミの山は富士山麓のオートバイの捨て場所の写真があつた筈だ。昼食はPHO2000という名のヴェトナムヌードルの店で。おいしかった。一品百四十円くらい。この店はすでに幾つかの支店を持つらしく、何とカリフォルニアにも支店があるようだ。ヴェトナム戦争は遠い昔か。オートバイを修理する人を求めてホーチミンシティを歩きまわる。仲々いい。昼食時に働く人はいないのか。足を棒のようにして歩きまわり解つた事は、市内の四つ角毎に修理屋さん

が仮設の修理工場を出しているらしい事。ホテルへの帰り道コーラの空きカンで作った自動車のオモチャ買う。仲々良いデザインでベトナム人は器用で手仕事好きだなあとと思う。

ライカ ホーチミン アポロ十三号 開放系技術の流れがつかめたかも知れない。

家具屋の問題点はそれぞれにオーシャンフレイトが異なる事。明朝はそれをつめてみる。一件につき²⁶ \$15⁰のひらきがある。ローカルチャージ含めて80\$くらいがオーデイナリープライスだろつか。なにしろ一件輸入してみよう。夜はマジエスティックホテルの5階レストランで食事。他に一人の客も無く流石にチョットおびえた。一流とは言はれるホテルのレストランで他に一組の客もないんだから。食事をすませる頃ようやく他に一組の客が来てホツとする。食後Barでドライマティーニを飲む。開高健の文章に引張られてそうしているのだが、ドライマティーニも全く開高健が言う程にドライではなく、むしろスイートマティーニだコレワ。全く小説家の言う事はアテにならないが、怒る私が馬鹿なので、今は二〇〇二年。開高健がベトナム従軍記者で死を逃れてここでドライマティーニを飲ったのはヴェトナム戦争の最中の一九六〇年代なのだから今から三〇数年昔のことだ。マティーニもきつと気が抜けてしまったのだろう。開高健の文体のタイトなりリズムも今では昔日の感ありと言う事か。今現在は世界は淡々と破滅的な時間を刻んでいるのだろうと実感する。広島黒水仙のマティーニは上等である。二十一時半部屋に戻る。アフガニスタンの戦争ではアメリカは徹底的にヴェトナム戦争の教訓を生かしたのだ。圧倒的な空爆によるタリバン壊滅状態はその結果だろう。戦争も全て非人間的な物量のシステムだけの現れを呈している。

一月十一日

六時眼覚める。今日する事は家具の輸入。路上の修理する人々の撮影。それを午前中に済ませてしまおう事。国際的に比較するならば原宿も仲見世通りもホーチミンシティのドンコイ通りに一歩も二歩もゆづるところがある。置かれている商品の多彩さと値段が敵わない。日本の主要都市の商店街特に観光目的のそれは国際競争力をつけなければ駄目だ。聖徳寺観音堂の家具はここから輸入してみようか。コンテナ本もあれば充分だろう。八時朝食。昨日路上でライカのフィルム交換成功。つまらない事が嬉しい。しかし古いライカを使ってみて一枚一枚ていねいに撮るようになったのがおかしいではないか。なにしろ撮るたびに絞り、シャッタースピード、距離を合わせなくてはならないんだから。ASA一〇〇までしかフィルムの感光度調整ができぬことを今朝発見する。まだASA四〇〇なんてフィルムが無い頃の機械なんだ。今まで撮ったやつチャント撮れてるんだろつか。一抹どころじゃない不安がよぎる。ASAマークのところ赤が出ていたのが気になる。マ運を天に任せるしか無い。

九時過マジエスティックホテル前のアンティーク家具屋へ。昨夕のおばさんと本格的な取引。レユアン通りに出している家具屋もこの店のものだと事。日本で言えば帝国ホテル横のいかにもな古美術商という事だろうか。薬箱タイプの中型の引き出しが沢山ついているタイプと丸い大きな中国風の飾り棚と二点購入。それぞれ三〇〇\$二七〇\$であった。五%の値引をさせる。値引きはしないとハッキリ言うので仕方ないだろう。ショッピング・ドメスティックTAX保険が百三九\$かかった。東京で買えば共に四、五〇万円のものだから、無事に荷物が到着すればの話したが、得な買い物である。勿論双方共にアンティークではない。新しく

ここで作っている物だ。一ヶ月程で東京に着くと言うから楽しみ
にしよう。世田谷村はアルミとガラスでスッキリし過ぎてい
るから、古めかしいヴェトナム製の家具はじっくりと納まるだろ
う。路上の修理する人の写真もとれたからほぼ目的は達成した。
昼ホテルに戻る。これ位のペースで動くのは疲れなくて良い。昼
食は又ヴェトナムハウスで。カニのビール蒸しというのを気張っ
て注文してみたが、コレはうまかった。スケッチする。

今日では一週間の東南アジアの旅は終わった。これ迄は旅と
普段の生活の間にいささかのギャップが在るように考えていたが、
出来れば東京に帰っても旅のマンマでありますように。あるい
は東京の生活が旅の延長のママにゆるやかな刺激に満ちたもので
あるように願うばかりだ。カンボジア、ヴェトナムの旅は日常の
延長のようなスタイルを押し通すことができた事が収穫であった。
この感じを身体で本当につかめればと思う。イライラもせず極度
な落胆もしない日常の歩行の中に全てが混入しているような生活。

一月十二日

昨日十五時から今朝五時半まで眠った。十四時間半である。二
日分の眠り貯金をした。カンボジアの三十四名は無事に帰国して
いるだろうか。ホーチミンシティを歩いて取り壊しの現場を
いくつか見かけたが何処でもそこから生まれるゴミをていねいに
とは言えぬが使い廻してゆこうとする努力をしていた。カンボジ
アでも渋井さんに言わせると取り壊しは無料なんだそうだ。ゴミ
を使う権利を与えるのとバスターだと言う。我家の一階を取り壊
したゴミの一部を木材を中心に残してはあるが、アレの使い道を
考えなくてはならない。今は余力が無いからゆっくりやるしか無
いが、そろそろ完成像らしきモノを描く必要もあるだろう。恐る

べきゴミ過剰社会だな全く、日本は。

五月のひろしまハウスレンガ積みツアーは現場でのレンガ積み
の他に何かいる。六〇才を越したらネパールのカトマンドウ盆地
キルティプールの修復にとりかかるときめているので、その準備
を兼ねた何かだ。まずは現場でのレクチャーを充実させたい。鈴
木博之、中川武両先生の協力を得なければならぬだろう。一人
では不可能だ。プノンペンを拠点にカトマンドウ、プリアタン
(バリ)へ動くなんて事ができれば良いのだが。航空便のシステ
ムがフレキシブルではないからなあ。ミャンマのパガンも組み込
めたらアジア建築文化スクールができるだろうが。佐藤健に相談
してみよう。プノンペンの三十四人が集まったという事実は決し
て小さなものじゃない筈だ。これはすでに小さなスクールだった
日本でしゃちこばってやってるよりもズツと自由で良いかも知れ
ない。飛ぶ教室だね。

昼前チエックアウト。買物をして三時くらいにホテルロビーで
本を読み始める。多木浩二「戦争論」面白くて読み続ける。昭和
天皇の戦争責任、南京の事件等かなり明快に言い切っていて小気
味よい。ニューヨークのテロとそれに続くアフガニスタンの戦争
の前一九九九年に書かれた本だが、この戦争が起きる事を予見し
ていた。グローバリゼーションと戦争の必然に関する論考も興味
深いものだった。多木さんの本は久し振りだったが、戦争論には
いたるところに多木さんの肉声が聴こえるような気がした。タン
ソンニヤット空港待ち合い室で夜十時ころ読み切った。カンボジ
ア、ヴェトナムと戦争が続いたところを渡り歩く旅だからリアル
に読めたのだろう。カンボジアの「ひろしまハウス」の歴史的意
味も、もう一度キッチンと考えてみる必要があるな。ひろしまとポ
ルポトのジェノサイドはやっぱり二〇世紀最大級の人類の悲劇で

あった。レンガ積みを指示しながら、その事を忘れかけていた。ひろしまの事ポルポトの事そして私の父も征った戦争の事、それをきちんと記憶して、出来得ればその歴史を基礎にして未来を考えようとする。その為のひろしまハウスなのだから。全ての素は歴史だ。しかし、それを声高に言う事は恥かしい事なのだ。恥かしいどころかひろしまやプノンペンで声も立てずに死んでいった幾百万の人たちの尊厳を踏みにもなってしまう。多木さんが紹介している「サラエボ旅行案内」のように戦争を引き起こしてしまふ大仰な大義や正義とは異なる世界の言葉を使って、レンガを積む秘やかな楽しさのような事を伝えてゆく必要があるんじゃないか。言葉の性格を変えてゆく必要さえある。

今、ヴェトナム時間十三日一時。フィリピン上空辺りを飛んでいるのかな。

一月十三日

朝六時過閑空着。別送品手続きをすませ、七時羽田への乗継ぎ待合い。今度の旅のフライトは全て順調過ぎるくらいにスムーズだった。九時前羽田。只今山手線に揺られている。こんなにキレイな電車が走っていて、でも人々の顔は精彩を欠いている。眼の光がうすいんだな。新宿からTAXIで十時半帰宅。長女の徳子がヴィザが取れずにアメリカに戻れずまだ家にいた。夕方屋上菜園に上り、チョットの間ポーツと過す。冷い風が吹いてはいるが、ウナロム寺院のテラスと何がちがおうか。同じだよコレワ。ますます同じにしてゆく生活をすれば良い。鳥が一羽周辺をうかいしながら飛んでいる。俺が帰ってきたのを確認しているんだ。羽の広げ方が何となく挑発的でこちらの戦闘意欲も湧いてくる。世田谷の制空権は今や世田谷の鳥である筈の尾長から鳥にとって代わ

られてしまった。これは是非共復古させなくてはならぬ。まずは家の庭に時々小鳥のエサをまいているのを習慣づけ、よろず鳥類をおびき寄せる。一階に何か生物を飼って私が生物一般鳥類にも広い気持を持つ人間なのだというのをアピールしてしまうのも良いかも知れない。まずは演技が必要だ。カラスは凶々しいからやってくるだろう。当然沢山やってくる。庭は黒い影で埋まってしまう位になるであろう。そこでカラスだけを脅しつける必要がある。銃の購入は考えにくい。空気銃は良くない。二階の物陰に隠れて銃を撃つのはカラスにも失礼であろう。それに周辺住民を恐怖のドン底に落とし込んでしまいかねない。家内も猛烈に反対するであろう。銃弾の如き言葉で私を撃つに決まっている。カラスぐらいで家内と闘うわけにはいかない。やっぱりパチンコだろうな。子供の頃雀を撃とうとして一発も当たらなかったアレだ。Y字型の小枝にゴムを装着して小石を飛ばす道具。アレの近代化されたのがあるようだから何とかして入手してみよう。そして春までは野菜が芽を出す頃までには我家の上空の制空権を握らなくてはならない。私の武装に対してカラスの野郎共が対策を講じてきたら、コレワ戦争になるだろう。カラスVS私の戦争である。上空をカラス共が編隊を組んで飛び廻り、時に急降下して汚物を投下したりすれば完全にコレワ戦争だ。ブッシュ大統領ならずともコレワ戦争であると宣言してしまう。軍事同盟とかガイドラインとかはその先のことだ。まずは開戦状態と呼べる程の状態にしなければいけない。近代化されたパチンコの数々を屋上に配備し見せつける必要もあるだろう。そこまでやったらアトは反戦運動などが沸き上がらぬように大衆の動向を用心深く見極めて進めれば良いのである。

田中一光氏が亡くなったという知らせが届いた。濃くもなくか

といつて薄くもなく淡々としたお附合いをさせていただいた。

ギヤラ間の展覧会、本づくりを御一緒させていただいたのが私にとつては最期になった。日本のグラフィックデザインの中心でこれから増々その求心力が期待されていただけにデザイン界の損失は計り知れぬものがあるだろう。キングではあったがフツと孤独な影が余切れる時があつて、精神の中核は芸術家そのものであつたに違いない人物だ。私はそのフツと影が差した時の一光さんのファンであつた。日本のグラフィックデザイン界は盟主無き混沌の時代へ向かうだろう。この世界にはホンマモンが居ないなもう。

一月十四日

五時起床。カンボジア、ヴェトナムのおかげで早起きの良い癖がついた。長女徳子が朝の便でニューヨークへ帰るので家内と一緒に成田まで送る。道が空いていて一時間チョツとで空港まで着いた。今度は六月頃に日本に帰るかもしれないとの事。大きな挫折を知らぬ奴だからまだ深みは無いが行けることまでヤレば良い。環境政治学という分野がいかなるものなのか良く知らぬが、いづれ私のやっている事とからむかも知れぬ。

午後室内連載の原稿書く。スケッチよりも書くのが楽になつたら恐いなコレワ。夕方屋上菜園に上り台所の生ゴミを土に埋め込む。一年もたてば家の屋根は栄養満点の屋根になるであらう。カラスが一羽となりの家の屋根にとまって横目で私を見ていた。

やっぱりカラスとの世田谷制空権を賭けた戦いは始まっているのだ。いよいよ戦争である。しかし冬の菜園は余りにも貧しい。まだいた筈の支那忘れな草、正月菜、金魚草八重大車草中華春菊など芽も出ない。明日にでも全部掘り返してみるか。アロエは霧除けにと考えたサクの下に移したら枯れた。論理的なのが嫌いなんだ

アロエは。松崎の倉二棟の保存再生をキチンと進める。鈴木博之の会所を生かす為にもそれは大事だ。あのブロックを隅々まで修理そして保存の理念が生きた場所にしないでほならない。一年後に会所を中心にした密度の高いゾーンを生み出すつもりである。